「欧米文化研究」第16号　2009年

フランソワ1世治下のパリのブルジョワ日記（前）
——「パヴィアの敗戦」までのニュースあるいは「噂」——

平　手　友　彦

『ラブレー　笑いと叡智のルネサンス』の「序文」冒頭で、スクリーチは「百年前ならばまだ明白だったに違いないラブレーの諸側面も、今となっては、一般人からはるか彼方へと離れてしまっている。ラブレーが大前提としていた事柄は、われわれ現代人の掌からますますこぼれ落ちてゆき、また、ラブレーにとって当たり前だった博識や常識的知識、ないしは広く受け入れられていた通念も、もはや手の届かないところへ立ち去ってしまった」[1] と語っている。この距離を埋めるべくスクリーチは筆を取るのだが、ラブレーの「笑いと叡智」の下地を成した「博識や常識的知識」は当時の人々にとっても「常識的」となっていたとは言い難い。「博識」から溢れ出た「年代記」4冊の読み手は当時の教養ある読者であり、決してその衣から連想できるような「民衆」ではない。ラブレーの凄まじい「博識」は、古代ヘブライ、ギリシャやローマの文芸のみならず、中世からルネサンス初期にかけての大衆文学作品に基づくことは言うまでもないが、そこには彼の立場と経験がもたらした同時代の情報が絡みついている。

ではラブレーが「年代記」を綴った時代の「立場と経験がもたらした同時代の情報」とはどのようなものだったのだろうか。これを理解するために、ラブレーのような博覧強記のユマニストではなく、当時を生きた普通のフランス人、渡辺一夫の言葉を借りれば「平均的フランス人」（後述）の場合から考えてみたい。本論は16世紀初頭のパリで綴られた二つのブルジョワ日記、すなわち作者不詳の『フランソワ1世治下におけるパリー市民の日記』とパリ高等法院附き弁護士ニコラ・ヴェルソリの『フランソワ1世下におけるパリー市民の日記』のテクストを比較検討しながら、当時のパリに生きる人々が得た情報とその知への結びつきを明らかにするささやかな試みである。

*

『フランソワ1世治下におけるパリー市民の日記』*Journal d'un bourgeois de Paris sous le règne de François Ier*（以下『日記』と省略）はかつて渡辺一夫によって『泰平の日記』として紹介された[2]。日記はタイトルが示すように1515年1月のフランソワ1世の即位から始まり（日付が現れるのは1515年1月25日の成聖式）、1536年8月6日のノートル・ダム大聖堂への総行列で終わる。作者はパリに住み、同時代を生きた人物であること以外は分かっていない[3]。『日記』

の日付は必ずしも時間の流れ通りに並ばず、頻繁に前後往来が認められるところから、作者はその日ごとの記述を並べたのではなく、後のある時点でまとめたと考えるのが自然である。文体も所々ぎこちなく、意味不明の箇所も少なくない。渡辺一夫が指摘するように『日記』の逸名作者が自分の意見を表明することは極めてまれで、公的な情報を書き記すことに終始している[4]。従って、私的な記述は著しく少なく、全体に事務的な印象を与える。しかし逆の見方をすれば、このことは作者が周りで起きた現象や社会の動きを色眼鏡を通してではなく、ニュートラルな「パリー市民」の位置に身を置いて見ていたとも言えるだろう。そこから渡辺一夫はこの『日記』作者をもう一つの日記作者ヴェルソリとともに「平均的フランス人」と呼んだ[5]。

そのヴェルソリの日記は『日記』とほぼ同じタイトル「フランソワ1世治下におけるパリー市民の日記」*Journal d'un bourgeois de Paris sous François 1er* を持つが、ヴェルソリの『家事日記』*Livre de raison* と呼ばれている（本論でもこの呼称を使用する）[6]。作者ニコラ・ヴェルソリ Nicolas Versoris は副題にあるようにパリ高等法院附き弁護士である[7]。『家事日記』は『日記』からほぼ4年遅れて1519年5月2日のニコラの結婚から始まり、『日記』よりも6年早い1530年10月末までの11年間の出来事が時間の流れにほぼ忠実に記述されている[8]。そもそも「家事日記」とは身近な日常の出来事を断章風に記録するものであるが、通常の「日記」や「回想記」に比べてその出来事が「客観性」objectivation を持って語られることが多い[9]。これを示すように、『家事日記』のヴェルソリの文体は平板で、ラティニスムやぎこちなさも散見される。公のことに関心はあるものの、身内や友人の死や出産、結婚、冷害や暴風雨のような自然災害、そして市中の治安といった身近な記述も多い。渡辺一夫によれば『日記』作者は重大な新しい動きを見逃していた「平均的フランス人」であるが、ヴェルソリも同様に「時代の新しさ」nouveauté de son temps に気付いていないようだ[10]。『家事日記』の記述は実際に出来事の現場にいた印象を与えるものの、多くの場合、出来事との距離はその記述の客観性から必ずしも近いようには思われない。ラブレーの『第二之書　パンタグリュエル物語』や『第一之書　ガルガンチュワ物語』に登場するあの愛すべき「パリの人々の物見高さ」[11] は二つの日記の中ではどうなのであろうか。

本論ではこの二つの日記の記述、とりわけ両者がともに取り上げたパリの日常のニュースや「噂」の記述を中心に比較分析していくが[12]、その前に当時の情報の入手について触れておきたい[13]。まずは16世紀初頭のパリの街角、例えばヴェルソリが住んでいたサン・タンドレ・デ・ザール教会（現在はサン・タンドレ・デ・ザール広場）の界隈で[14]、同じ視線の高さに身を置いて耳をそばだててみよう。四つ辻ではラッパの音も高らかに「広報」が報じられ、誰かが何かを読み上げたり謡ったりしている。人の輪からは「噂」話も聞こえてきて、その輪の中心には旅人がいるかもしれない。また、小街区ごとに行われていた「ブルジョワの夜回り」も重要

な情報源になっただろう[15]。文書が張り出されたり、壁には何らかの情報が書き付けられているのも見える。また、一枚ものの刷り物、オカジオネル occasionnel、かわら版 canard やパンフレ、そして活版で印刷された書物あるいは写本を手に取ることもできる[16]。もちろん城壁で閉ざされた狭いパリの街では出来事を目撃することも可能だ。おそらくこうして入手した情報に対して二人はどのような態度を示したのだろうか。「表現」と「解釈」の二つに分けて問題点を明らかにしておく。

まず第一に、表現についてである。私たちの日記作者は得た情報を、「パリの四つ辻でラッパの音とともに発せられた」fut publié à son de trompe par les carrefours de Paris、「高等法院で告げられた」fut prononcé en la cour de Parlement、「ニュースがもたらされた」vindrent nouvelles、「語られた」est récité、「人々が言っていた」on disoit、「噂であった」le bruit estoit、「噂が走った」court le bruit、「手紙が公開された」furent publiés des lettres、「手紙が届いた」furent apportés lettres 等と始めて報告している。「もたらされたニュース」、「言っていたこと」、そして「噂」とそれぞれ表現は異なるが、この表現の違いは内容のそれをどれほど忠実に反映しているのだろうか。J.-N. カプフェレは「噂」を「公式のニュース・ソースによって公然とは、まだ裏書きされなかったり、あるいはそれによって否定された情報の、社会体内での出現と流布」としているが、これは極めて現代的な解釈である[17]。そもそも16世紀における「噂」rumeur は、G.-A. ペルーズによれば「群衆のとどろきあるいは喧噪」grondement ou tumulte d'une foule の意味で用いられていた[18]。日記作者たちが実際に使用した「噂」bruit という語は、「裏書き」も「否定」もされるところまでは検証されていない、少なくとも検証を意識していないニュートラルな内容を示しているように思われる。つまり『日記』や『家事日記』での「噂であった」と「人々が言っていた」の間にはその表現に見合うだけの差はない[19]。二人はこの差を意識することなく、自分が得た情報を書き付けていく。

第二に、それでは得た情報はどのように解釈されて日記の中に組み込まれていったのか。彼らにとって情報は何れにせよ「真新しいこと」nouvelle（つまり「ニュース」）であった。だからこそ日記に書き付けねばならなかった。では、その情報に対する評価あるいは判断はどの程度行われたのであろうか。そして、そのために彼らはどのような語りの形式や情報の整理を用いたのであろうか。結果的に言えば、二人の記述はほぼ半世紀前に『年代記』*La Chronique*（とその元となる『回想録』*Mémoire*）のために情報を収集しながら、他方でボッカチオの『デカメロン』を意識して自らの『新百物語』*Les Cent Nouvelles Nouvelles* に「小話」nouvelles[20] を几帳面に書き留めたメスのフィリップ・ド・ヴィニュール Philippe de Vigneulles[21] には遠い。また、現場にも赴く収集マニアで、「物語作家」としての想像力と判断力を持ち合わせていた半世紀後のピエール・ド・レトワル Pierre de l'Estoile が残した『日記』*Mémoires-*

Journaux[22] とも異なる。「収集」へのこだわりや情報の「判別」、そして「小話」として語り得るだけの力は私たちの日記作者には見い出せないように思われる。わずかにニュースの感想を記することはあるが（これは特にヴェルソリにその傾向が強い）、それはとてもではないがフィリップやレトワルの比ではない。その意味でフランソワ1世治下のパリでブルジョワによって書かれた二冊の日記は、まさに「平均的」、いや「平凡」でさえあるだろう。だからこそ一層『日記』と『家事日記』は当時の市井の人々の情報との接し方を考察する上で貴重な証言と成り得る[23]。本論では、パヴィアの敗戦でフランソワ1世が囚われの身となり、全権を委任された母太后もリヨンにあったパリ、いわば「無防備都市」となった1525年春のパリまでを辿る。

*

まずはヴェルソリが結婚して筆を取る1519年5月以前までの『日記』を読んでいこう。冒頭の出来事は先に述べたように、フランソワ1世の成聖式である。新王は歴代の王と同様にランスで成聖式（1515年1月25日）、続いてサン＝ドニで戴冠、そして2月15日にパリ入市式を行った。日記の記述は「並々ならぬ数の王侯貴族が列席した」、「荘厳かつ豪華な祝いの場となって、多くの王侯貴族がいた」、「巨大な凱旋門があって、数多くの王侯貴族が参列しておりこれほど素晴らしい入市式は今までに見たことがない」という記述のみで、出来事の大きさとは裏腹にその記述は極めて簡素である[24]。スガンの調査によればフランソワ1世の成聖式と戴冠、そして入市式については、少なくとも8点のオカジオネルが現存し、その記述の多くは4紙葉から8紙葉の長さに収められているが、中には12紙葉のものさえある[25]。逸名日記作者にはこれらのオカジオネルは目に留まらなかったのだろうか。『日記』では入市式、総行列、定例行列を始めとする各式典の記述が多い。例えば1517年1月28日にマクシミリアン皇帝の大使ルー Ru 殿がミラノ公国をめぐる和議批准のためにパリに来た際には、大使一行の服装はまるで見てきたかのように細かく描写され（「服の袖にはキプロス金糸でヒトコブラクダが刺繍されていた」）、これは同年5月12日のクロード王妃のパリ入市式での女性達 princesses の描写や（「金色の帽子を王冠のように被り」）、更に後述する1518年12月のイギリス大使一行を迎えた「バスチーユの大宴会」（12月22日）の詳しい叙述にも繋がる[26]。何れもこれらを目撃したか、あるいは何らかの文字情報を得ていなければこのような細かい描写は難しい。事実、「バスチーユの大宴会」では「実際に見た者でなければこの豪華さは言い表し難い」[27] と「目撃」（あるいは「目撃」談の読書）であることを表明している。『日記』作者はフランソワ1世の成聖式と戴冠、それに続く入市式を目撃しなかったのではないか。そして、文字情報は入手し得たのかどうかは判然としないが、それを日記に組み込めなかった、ということが推測できるのではないだろうか。

1515年9月13日にフランドルのアントウェルペン上空に「大きな彗星」grande comtte が飛来した。「赤く燃えるドラゴンの形をした彗星が上空に見られ、数日上空にあったが、やがていくつもの破片に砕けて海に落ちた」[28]。これを『日記』作者は翌日のフランス軍によるマリニャーノ勝利の前兆と読んだ。後の1518年1月では、姿が見えず音だけが聞こえる兵士達の大合戦というローマ怪異現象をも「異教徒トルコ軍」infidelles mahométistes と関連付けるが、これらには伊藤進氏が指摘するように「驚異の現象に何らかの徴を認めるという当時の人たちの心性」を読むことができる[29]。確かに『日記』作者は素朴な信心を持つ人である。1517年はパリ周辺で「冷害」vignes gelées に「大干ばつ」grande seicheresse が続いた散々な年であったが、6月7日に聖ジュヌヴィエーヴの聖遺物箱を掲げた総行列が行われると、彼は「その後3ヶ月程雨が降り続いた」[30] と素直に記す。また1519年7月には興味深い出来事が起こる。訴願審査官 Maître des requêtes ラ・ベルナード La Vernade 殿の妻（ラランヌの注によれば、彼女は「モーの人々」の一人ギヨーム・ブリソネの同名の父ギヨーム・ブリソネ Guillaume Briçonnet サン・マロ枢機卿の娘であり、ブリソネの姉妹である）が突然死した。死因を調べるために体を開いたところ、心臓の上に「一匹の生きた虫」un ver en vie がいて、どうやらそれが心臓に穴を開けたことに因るようだ。この虫は解毒剤「メトリダル」métridal をかけても一向に死なない。ところが「ワインを浸したパン」pain trempé en vin を与えると忽ち死んだ。そこから『日記』作者は「少なくとも危険な時には en temps dangereux、虫に気を付けるためにパンとワインの朝食を取った方が良いということになった」[31] とまとめる。死亡した娘が改革の徒ブリソネと血縁関係があり、そして「危険な時には」の言葉があるだけに、ブリソネが1516年にモーの司祭に着任し、その後に始まる「モーの人々」の改革と思わず関連付けたくなる。そこまで深読みしないまでも、この「ワインを浸したパン」の効用には『日記』作者の信心を確実に読み取ることができるだろう。と同時に、この情報も描写（「メトリダル」という語の使用など）から推測すれば、何らかの文字情報に頼ったものと考えることができる。

次に情報の文書化の時間を考える手掛かりとして1518年12月22日の「バスチーユの大宴会」を取り上げてみよう。上述したように『日記』作者はこの宴会の「目撃」者である。「バスチーユの大宴会」にはその模様を伝える『1518年のバスチーユ宴会』*Fête à la Bastille en 1518*と呼ばれる版本（版元はジャン・グルモン Jehan Gourmont）が残されている[32]。10紙葉からなるこの「版本」は大宴会の模様を詳細に伝えており、そこには私たちの『日記』の記述と重なる場面も見つけることができる[33]。『日記』作者がこの版本を参照したかどうかは明らかではないが、興味深いのはこの版本に付けられた大法官アントワーヌ・デュプラ Antoine du prat Chancellier への献辞の日付である。版本の奥付 colophon を見ると上梓は1518年とだけあるが、献辞には1518年12月23日と日付までしっかり書き記されている。大宴会は同月22日に開催され

ていたので、この献辞の日付はその翌日にあたる。版本の翻刻者ボナルドによると、さすがにこの日付は刊行日ではなく献辞が書かれた日付だろうとしているが[34]、それにしても1518年上梓であれば、奥付を信ずれば遅くとも新暦の1519年4月23日（1519年の復活祭は4月24日、旧暦ではこの日から1519年が始まる）までに刊行されていなければならない。スガンによれば16世紀前半のパリ（あるいはルーアン、リヨン）に住んでいる者は、出来事が生じたわずか数日後（遠くイタリアやスペインの出来事でも2〜3週間後）にその話 récit を読むことが可能だったらしい[35]。それだけ印刷工房では猛烈な仕事が展開され[36]、当時の読者はそれほど情報を求めていたのである。

*

ここからはヴェルソリにも参加してもらおう。彼もまた『日記』作者と同じく驚異に徴を認めた。ヴェルソリは時には日常の些細からも徴を探す。1524年10月29日にフランソワ1世軍がミラノを奪取した報がパリにもたらされると、市内は祝勝ムードに包まれ、翌日からは連日戦勝感謝行列が行われた。翌30日のノートル・ダム寺院での日曜ミサのことである。パリのお歴々の目の前で寺院の天井から一片の石が福音の書を置く台座の「鷲飾り」aigle の上に落ちた。ここからヴェルソリは「鷲 aigle に喩えられる」カール5世の失調を「予感」conjecturé した[37]。この心性は『日記』作者と同じものである。

先に『日記』作者の驚異への反応を「アントウェルペンの彗星」と「ブリソネの娘の虫」に見たが、この頃最も注目すべきはルターの出現と奇形仔牛の話である。1520年の『日記』ではザクセン公国で「異端の神学者」théologien hérétique ルターが教皇レオ10世とパリ大学神学部によって破門されたことが触れられ、その直後の1522年12月12日に問題の仔牛が登場する。同じくザクセン国はフライブルグのとある肉屋が牝牛の腹から奇妙な動物を取り出した。おとなの奇形の頭を持ち、大きな「冠」couronne を戴いて、牛の形でありながらも豚の姿に似て、皮膚は二重の「頭巾」chapperon のようで頸の肉に繋がっていた。この怪物は絵に描かれ、当時「市中で広く売られた」vendu publiquement en ce temps par la ville とあるところから、『日記』作者はこの遠方での出来事をやはり何らかの文字情報によって知り得たのであろう。記述の終わりには「その時につくられたバラード」Ballade qui fut lors faicte の引用が次のように始まる。「ルターがアウグスチヌス会の信仰を奉じた時は人間の姿をしており、顔は腐ることはなかったが、自らのもう一つの信仰によってその顔を汚してしまった。この怪物が伝えているからだ、全人類に対して彼の近づき難く奇妙な様を。」[38]「ザクセン」という場所、怪物の「冠」と「頭巾」の様相、そしてこのバラード。『日記』ではこの二つの出来事の関係性には直接触

れてはいないが、伊藤進氏がここでも指摘するように、この怪物の発生に何らかの秘められた意味、すなわち神の懲罰を見ていたと考えるのが自然である[39]。では『家事日記』はどうなのであろうか。彼は「市中で広く売られ」ていたはずの文書について何も記していない。同じ1522年12月にはこの頃のこととして、ルターというドイツの「僧侶」moyne が教会の「誤謬」ereurs をまとめて本にしたこと、パリでこの動きに同調する者がいたが、ルターとその著書がパリの神学者達によって「忌むべきで非カトリック」damnables et non catholiques であると断じられると、その動きも下火になったことが記されている[40]。この客観的な記述の中ではルターに対する考えは直接表明されてはいない。しかし、ヴェルソリは後の1524年6月になって、この頃のフランス王国に降りかかった「災いと責め苦」plaies et persécutions は神の「憤り」indignation によるものであるとして、戦争、飢饉、疫病（ペスト）、天候不良、地震、王権争いを並べ、最悪なものに不当な税や社会動乱とともにルターの「誤謬と危険で毒のある教義」l'erreur et venimeuse et dangereuse doctrine を挙げる[41]。確かにここにはヴェルソリの「異端」に対する態度、『日記』作者と共通する忌避をはっきりと読み取ることができる。だが他方で、ヴェルソリは『日記』の「平均的フランス人」とは異なる姿も見せている。ルターを破門した教皇レオ10世その人が亡くなった際（1521年12月）にヴェルソリは、教皇はフランスから自分の都合のよい物を取ったフランス王の「本当の敵」vray ennemy であると言い切るのだ[42]。これは愛国的立場から生まれた過激な表現とも受け取れるが、それにしても教皇に対して「本当の敵」とはラディカル過ぎはしないだろうか。

以上のように、二人の日記作者は「驚異」の情報が何を意味するかを考えることなしに済ますことはできない。彼らをそのような衝動に走らせた要因をここで十分に分析することはできないが、主たる要因の一つには日常を取り巻く「死への恐れ」があったことが考えられないだろうか。『家事日記』を校訂したジュタールは、ヴェルソリの時代には「凄まじい脅威や恐れが人々の生に重くのしかかっていて、自由な精神を持つことができなかった」、だからこそ生き続けることへの関心があったのであり、彼が家族や身近な死についてあれほど記したのも無理はないと分析している[43]。確かに『家事日記』の中では誰かの「死」（「死亡する」aller de vie à trespas、「埋葬された」être enterré）と出生（「出産した」acoucher）がこれでもかと執拗に書き留められる。事実ニコラ自身も最初の妻を病気で亡くし、彼の兄弟ギヨームにいたっては4回妻と死別しているのだ[44]。この生と死へのこだわりは「驚異」から何らかの意味を読み取る心性を裏打ちするものではないだろうか。

*

彼らの日常を襲うものは「驚異」だけではない。敗残兵か脱走兵か何か分からない「悪漢連中」maulvaix garçons がパリ周辺を暴れ回り、それが徒党を組む。放火も発生する。また、1523年秋以降は北仏にイギリス軍や旧ブルゴーニュ公国の軍隊が襲いかかり、パリもその脅威におびえる。度々パリの城門は閉じられ、その警備は厳重になる。不意に襲いかかる自然の驚異よりも、目の前の人間の「狂気」の方が遙かに恐ろしい。しかし犯人が判明していれば、これを捉えて罰すればよい。暴徒や放火の罪は大きく、引っ捕えられた者は極刑に処せられた。以下に二つの事件を取りあげてみよう。

一つは1523年7月のロワ・ギヨ Roy Guillot 事件と呼ばれるものである。首謀者の名はギヨーム・ド・モントゥロン Guillaume de Montelon。自らを「王」Roi と名乗り、歩兵500名と2～3,000名の悪漢連中を率いて、オーベルニュ、ブルボネ、リムーザン、ポワトゥー地方を荒らし回り、彼らを捉えようとした地方代官までも殺害した。『日記』作者によると、このモントゥロンはフランソワ1世が派遣したド・レスキュル de l'Escul 殿によって捉えられ、同月29日グレーブ広場で「従者」jeune fils とともに斬首に処せられる。斬首に先立ち両手が落とされ、片手を王宮、もう一方をノートル・ダム寺院の前に置き、斬首後は四肢を割かれて、その破片は4つの主たるパリの城門に晒された。斬首に失敗した死刑執行人ロティヨン Rotillon はパリ総奉行の獄に繋がれたことまで記されている[45]。『家事日記』もこの事件を同日付で報告しているが、その記述は少し異なる。首謀者の名前はモークルー Mauclou、その処刑では王宮で「右手」main dextre が落とされ、グレーブ広場で斬首の後、やはり四肢を割かれてパリの主たる4つの城門の「絞首台」potences に晒された。彼の「従者」fourrier も斬首されて、その首は主の四肢の一部と供にサン・タントワンヌ門に晒された。ヴェルソリはこの処罰に「重い」grave という形容を付している。処罰の理由は『日記』作者とほぼ同じであるが、『家事日記』にはこの荒くれ集団が暴れ回った具体的な地域名や「ロワ・ギヨ」という事件名は挙げられておらず、逮捕した人物の名前も記されていない。ヴェルソリは最後に、首謀者モークルーは敵と結託してフランス国王の放逐を企んでいたように思われるが、本当のところはどうか分からない。もしそのような意図があったならば、より重い刑に処せられていただろうと分析している[46]。この事件に関する記述（首謀者名、処刑の手順、従者の処刑や死刑執行人の失敗の有無）と反応の微妙な違いを私たちはどう読めばよいのだろうか。どちらも市庁舎前でこの処刑を目撃していたのか。記述の点で言えば『日記』作者の方がヴェルソリのそれよりも細かく、固有名詞の取り扱いでも三面記事の読書の痕跡が残されているように思われる。この逸名作者はやはり何らかの文字情報に頼っていたのではないだろうか。

次に1524年5月のトロワの放火事件を見てみよう。『家事日記』によると[47]、このトロワの放火では1,500棟の民家と「五つないし六つの教会」cinq ou six esglises が燃えた。放火の実行

犯は「噂によると」comme l'on disoit 王国の敵から送り込まれた子ども達で、彼らは捉えられたが背後関係は分からないと「言われていた」l'on disoit。街の被害は甚大だった。というのは「聞くところによると」l'on disoit 被害総額は百万金貨以上に相当したからである。使用された火薬は水での鎮火が難しいギリシャ火薬 feu gregois「らしい」l'on dict。捉えられた犯人たちは他の街にも放火する計画だったので、連絡を受けたパリ当局も急遽市庁舎で会議を開いて各街区で夜回りの実施を決定した[48]。パリ市中はこの放火に恐れ戦き、道路に面した窓や地下への通路は塞がれ、宿屋は防火水を用意するように指示された。『日記』にもこの恐るべき事件は4ページ以上に渡って報告されており[49]、その叙述はヴェルソリに比べて格段に詳細である。犯行に及んだ子どもの年齢は7～9歳、その黒幕達は彼らに金を与えて操っていた。使用された火薬と放火の実際がこと細かに語られ、放火の被害としてトロワ市中で燃え落ちた七つの教会すべての名称、燃えた通り名（固有名詞が出てくるものは九つ）や小麦市場などの施設名も列挙されている。また、犯行に及んだ連中は後に火あぶりや絞首刑に処されたことにまで触れる。先に引用したようにヴェルソリの報告では、短い文の中にも「噂によると」、「らしい」という表現がしきり使用されたが、『日記』は長い記述であるにも関わらず、ヴェルソリに比べるとその表現の使用頻度は低い[50]。同じパリにいながら、そこから直線距離にして100キロのトロワの放火、それもいつパリに飛び火するかもしれない大事件の情報記述が大きく異なっている。これはヴェルソリが耳から得た情報を記載し、『日記』作者は何らかの文字情報を読んでこれを書き留めたことを示してはいないだろうか。そして、その情報量の蓄積が『日記』作者に言わしめたのであろう。彼は放火犯同定の困難を語る件で、「このことは天罰 pugnition de Dieu のように思われる」[51] と短く感想を述べる。出来事が明らかな人災によるものであっても、『日記』作者はそこから意味を読み取ろうとすることを止めない。

*

1524年10月末のミラノ奪取でパリが戦勝気分に浮かれている様子は先のヴェルソリの記述で少し触れた。しかし、そこから四ヶ月後には一転、フランスは屈辱的なパヴィアの敗戦を味わうことになる[52]。この敗戦に関しては、『日記』ではアルバニ公 duc d'Albanye によるナポリ遠征（1525年1月）の記述でフランス王が捕虜になったことが先取りして（つまり初めて）記録される。続いて2月24日（正にパヴィア敗戦の日）の日付で「フランス人の大敗北の日」journée de la desconfiture des François と明記され、ボニヴェ Bonnyvet 提督を始めとする戦死武将名の列挙、王のクレモナ近郊ピッズィゲトーネ Pisqueton 城への連行とスペインのカール5世の元への搬送、王とともに捕虜になった人物名の列挙がなされる。そして、ようやく3月

7日に敗戦と王の捕虜の報がパリに届き、市内に動揺が走ったことが記述される[53]。翌日には市門警備が厳重になり、十二あるうち七つの門が閉じられた。シャラントン Charenton とパリ間の往来や、日曜・祝日は寺院勤行儀式が終わるまで「遊戯」jeux が禁止され、学校行き帰りの生徒にも歌を歌わせないように指導された。このような「禁止令」が次々に「同様に」Item と列挙されていく[54]。パリ市内は「大敗北」と王の不在による動揺、いつ攻め込まれるか分からない不安に陥れられていることは『日記』の叙述からも容易に読み取ることができるが、当の『日記』作者は内容を淡々と記述するばかりで、その事態に対する意見や感想を述べていない。

他方、ヴェルソリはどうであろう。『家事日記』ではこの「驚くべき極めて辛いニュース」merveileuse et moult douloureuse nouvelles がパリにもたらされたのは3月6日であった[55]。手短にパヴィアでの敗戦、王の捕虜、そして王とともに捕虜になった武将名と戦死者名が『日記』と同じように列挙された後（この捕虜・戦死者リストは『日記』とほぼ同じであることから、何れも何らかの文字情報に依るものと考えられる）、パリ市中の反応を伝える。四つを除いて全ての市門は閉じられ、外国人には集会、悪事、悪口の禁止が布告された。『家事日記』でのパヴィア敗北の記述は『日記』のそれに比べて短く2ページにも満たないものであるが、注目すべきはその短い記述の中にもヴェルソリの感想が述べられていることである。「手短に言えば、フランスの花と騎士道は捉えられ、あるいは亡くなった。神がその恩寵、慈愛、そして慈悲でもって救済しなければ王国の全てが破壊されて失われることになるだろう。」[56] 決定的な敗戦と国王という拠り所を失ったこの率直な絶望感の表明は、同じ出来事をより詳細に語っている逸名の『日記』作者には現れない。

動揺するパリで二人のブルジョワ日記はなおも綴られるが、本論はパヴィアの敗戦の報が伝えられたこの1524年3月で一旦終える（祖国を「裏切る」シャルル・ブルボン公への態度、手紙によるニュースの速度については紙数の都合で論じられなかったが、これらについても次の機会に譲る）。

注

1) マイケル・A・スクリーチ（平野隆文訳）『ラブレー　笑いと叡智のルネサンス』白水社、2009年、p.23.

2) 『泰平の日記』初版は1960年に白水社から出版され、『渡辺一夫著作集』（筑摩書房）では第9巻「乱世・泰平の日記」（1970年刊）に収められた（本論での引用は後者の『著作集』による）。これと対を成す『乱世の日記』（講談社、1958年）も同じく「パリ一市民の日記」の名を持つが、こちらはほぼ1世紀前の作者未詳『シャルル六世・シャルル七世治下におけるパリ一市民の日記』（1405年～1449年）を題材としている。『日記』の草稿 manuscrit はパリ国立図書館に一部のみ現存し、

本論のテクストにはこれを初めて翻刻した*Journal d'un bourgeois de Paris sous le règne de François 1er (1515-1536)*, par L.Lalanne, J. Renouard, 1854を使用した（引用には*Journal*とのみ記し、日付は新暦に統一した）。Lalanneは「序文」Préfaceでこの草稿の所在をfonds Du PuyのNo.742と記しているが、L. Dorez, *Catalogue de la Collection Dupuy*, t.II, E. Leroux, 1899, p.370によれば、Collection Dupuy No.743に"«Journal du règne du roy François premier», 1515-1536 (1-184)"の記載があるので、これは誤記であろう。なお、草稿No.743とともにしばしば言及される草稿No.23288はこのNo743を18世紀に写したものである（H. Omont, *Catalogue général des Manuscrits français, anciens petits fonds français*, t.II, E. Leroux, 1902, p.109）。また、『日記』の翻刻本はLalanne版の他に、渡辺一夫が使用した*Le Journal d'un bourgeois de Paris sous le règne de François 1er (1515-1536)*, par V.-L. Bourrilly, A. Picard et fils, 1910がある。Lalanne版は1965年にJohnsonからリプリント版が出ており、最近ではPaleoのSources de l'histoire de France叢書に二冊本となって2001年に刊行された。

3) *Journal*, Préface, p.i. Bourrillyの翻刻本を使用した渡辺一夫も、著者は不明ながら「パリに住んでいた知識階級の人」であるとしつつ、Bourrilly版に著者複数説があることを紹介している（渡辺一夫、前掲書、pp.154-155）。

4) 同上書、p.154.

5) 実はこの「平均的フランス人」という表現は『泰平の日記』の中では一度も使われていない。二人の日記作者に対して渡辺一夫がこの言葉を用いるのは、後の1970年に発表する「ルゥイ・ド・ベルカン事件と二つの『日記』」（同じく『渡辺一夫著作集』第9巻に所収）の中である。そこでは二人の日記作者を「当時の新興市民階級に属していたのであり、当時の「平均的フランス人」Français moyenだったと言える」（同上書、p.413）と定義付けている。しかし、この「平均的」moyenは単なる叙述のためのものではない。渡辺は更に続け、この「平均的フランス人」がすぐ側を通過する宗教改革という重大な新しい動きを見逃していた、あるいは「この革新思想は、過度な体制破壊行為として、或いは思想とは無関係な私利私欲に走る暴民たちの暴行として現れることがしばしばあったために、新興市民階級の中核をなしていた「平均的フランス人」たちは、これに賛成はできかねたことも当然だったかもしれない」（同上書、p.420）と説明している。「平均的」であることは、すなわち無意識的に、あるいは意図的に傍らに佇んでいたことの証でもある。『泰平の日記』の時点では、この『日記』作者に対して「ごく平俗なパリの市民たちの代弁者」（同上書、p.182）としつつも、「平均的フランス人」まで至ってはいない。この落差は時差によるものではなかろうか。「ルゥイ・ド・ベルカン事件と二つの『日記』」の論を閉じる際に、渡辺一夫は「私も「平均的日本人」として、何か重大なことを見すごしているかもしれない」（同上書、p.437）と書き置く。ここからは極東の地で自らが置かれた時代を16世紀初頭のフランスに更に一層重ねたくなる要因があったことを伺わせる。この「平均的」には1970年前後の「知識人」の自戒が込められているとは言えないだろうか。

6) ヴェルソリの『家事日記』は，本論で使用するテクストの校訂者F. Joutardによって「パリ高等法院附き弁護士ニコラ・ヴェルソリ氏によって1519年から1530年につけられた家事日記」le livre de raison tenu de 1519 à 1530 par maître Nicolas Versoris, avocat au Parlement de Parisと副題が付されている（*Journal d'un bourgeois de Paris sous François 1er*, texte choisi, établi et présenté

par Philippe Joutard, Union Générale d'Editions, 1963. 引用には *Livre de raison* と記す)。この『家事日記』は1885年に G. Fagniez によって "Livre de raison de Me N. Versoris, avocat au Parlement de Paris (1519-1530)" として *Mémoires de la société d'Histoire de Paris et d'Ile-de-France*, XII, 1885, pp.99-222で翻刻されている。ヴェルソリに関するほぼ唯一の論考と言ってよい M. Lazard の論文によれば、『家事日記』の写本はバチカン図書館に所蔵されており (Fonds de la Reine 671)、Fagniez の翻刻はこれを写したものである (Madeleine Lazard, "Le livre de raison de Nicolas Versoris", in *Parcours et rencontres: mélanges de langue, d'histoire et de littérature françaises offerts à Enea Balmas*, 2 vol., Klincksieck, 1993, t.1, pp.393-403)。

7) ヴェルソリ家は代々弁護士の家系のようで、その中には1565年にパリ大学の占有権をめぐる訴訟でイエズス会側弁護士として Estienne Pasquier と争ったピエール・ヴェルソリ Pierre Versoris がいる。後述するように、ニコラ・ヴェルソリは並々ならぬ執着心で親類縁者や同僚他の死と近親者の出生を『家事日記』に記しており、そこから彼の親類関係を探ることができる。1525年1月18日に二人目の妻との間に生まれた息子の名はピエール Pierre で、その代父 parrain となってくれたニコラの兄弟の名前もまたピエール Pierre であった (*Livre de raison*, p.76)。Moreri の『大歴史辞典』に照らすと、先の Pasquier と争った1528年2月16日生まれのピエールはこのニコラの兄弟ピエールの息子、つまりニコラの甥ということになる (voir L. Moreri, *Le grand dictionnaire historique*, t.10, Les libraires associés, 1759, p.555)。なお、「シャトレ裁判所附き弁護士」advocat en Chastelet としてヴェルソリ Versoris の名が1518年に二度『日記』に登場するが (*Journal*, p.65 et p.69)、それがニコラの兄弟のピエールなのか、あるいは同じく兄弟のギヨーム Guillaume なのか判然としない。

8) Fagniez の校訂では全体は434パラグラフで構成されているが、Joutard は死亡者記述と検察官の交代に関する記述を除いて (ヴェルソリの家族と死亡理由や感想の付いたものは採用) ほぼ全てを校訂した (*Livre de raison*, Introduction, pp.11-12)。

9) Madeleine Lazard, *op.cit.*, p.393.

10) *Livre de raison*, Introduction, pp.7-8.

11) 『第二之書　パンタグリュエル物語』第7章及び『第一之書　ガルガンチュワ物語』第17章を参照。

12) 同時期のパリの「無名人」日記・年代記としては、サン・ヴィクトール修道院の修道士ピエール・ドリアール Pierre Driart (1484-1535) によって綴られた『年代記』*Chronique* ("Chronique parisienne de Pierre Driart chambrier de Saint-Victor (1522-1535), publié par F. Bournon", in *Mémoires de la société d'Histoire de Paris et d'Ile-de-France*, XXII, 1895, pp.67-178) や作者不詳の『フランソワ1世王の年代記』*Chronique du Roy François Ier* (*Chronique du Roy François Ier (1515 à 1542)*, publiée par G. Guiffrey, Paris, 1859) がある。前者は、洪水を予言する占星術師と終末論的不安の関係が D. Crouzet によって繰り返し指摘され (D. Crouzet, "Sur la signification eschatologique des "canards" (France, fin XVe - milieux XVIe siècle)", in *Rumeurs et nouvelles au temps de la Renaissance*, Klincksieck, 1997, pp.31-32)、後者については当時印刷流布していたオカジオネルとの関係が Seguin (J.-P. Seguin, *L'information en France de Louis XII à Henri II*, Droz, 1961, p.33 n.1) に取り上げられており、どちらの年代記も重要であることは承知しているが本論文では残念ながら論じる余裕がなかった。

13) この「情報」という言葉を本論のような16世紀のフランスを対象とする論述の中で使うことに違和感を感じている。この言葉の響きが持つ「現代性」がアナログのこの16世紀の時代をはじくような気がする。ラブレーが「作家」でもなく「小説家」でもなく、かと言って「年代記作家」でも落ち着かないので「物語作者」と言わざるを得ないのと同じである。Seguin も "information" という語を使っているが、「情報」にはいつまでも座りの良さを感じない。

14) E. de Ménorval, *Promenades à travers Paris*, L.-Henry May, 1897, p.9を信ずればである。

15) 当時のパリにおける都市機能、特に街区システムや「夜回り」については、高澤紀恵『近世パリに生きる　ソシアビリテと秩序』（岩波書店、2008年）の「第1章　閉鎖する都市」を参照。

16) 「オカジオネル」occasionnel は「戦場でのエピソード、入市式、宮廷行事、成聖式のようなその時々の大きな出来事を語った刷り物」であり、「かわら版」canard の方はむしろ「三面記事的な出来事をその折々に販売するために刷ったもの」である（Geneviève Guilleminot-Chrétien, "Les canards du XVIe siècle et leurs éditeurs à Paris et à Lyon", in *Rumeurs et nouvelles au temps de la Renaissance, op.cit.*, pp.47-55)。例えば、1520年6月の『日記』には、フランソワ1世とイギリス王ヘンリー8世との間で行われたアルドル Ardres での「金襴の陣の会見」（『日記』の記載では "voyage d'Ardres"）が「印刷されて街で広く売られた」imprimé et vendu publiquement par la ville のでここでは何も書かないと記されている（*Journal*, p.85. 同じような記述は p.332と p.421にある)。Seguin によれば、三面記事的な出来事を扱ったかわら版は1529年以前には見つかっておらず、オカジオネルは1488 年から1529年までに印刷されたものが約200現存しており（J.-P. Seguin, *L'information en France avant le périodique*, G.-P. Maisonneuve & Larose, 1964, pp.7-8 et p.23)、これらの印刷物は当時の日記・年代記作者によって広く利用されていたようである（J.-P. Seguin, *L'information en France de Louis XII à Henri II, op.cit.*, p.31 et passim. オカジオネルおよびかわら版の形状的書誌データについては *ibid.*, pp.54-129を参照)。

17) J.-N. カプフェレ（古田幸男訳）『うわさ　もっとも古いメディア』（増補版）法政大学出版局、1993年、p.22.　高橋薫氏もピエール・ド・レトワルの『日記』の「噂」の分析において、このカプフェレの理論的応用を断念している（高橋薫「アンリ三世・四世治下のパリの〈噂〉（後）　ーレトワルとその『日記』ー」、『駒澤大學外国語部論集』第31号、1990年3月、p.106, 注11)。この注は高橋薫『歴史の可能性に向けて　フランス宗教戦争期における歴史記述の問題』（水声社、2009年）に同上論文が収められた際には省略されている。

18) Gabriel-André Pérouse, "De la rumeur à la nouvelle au XVIe siècle français", in *Rumeurs et nouvelles au temps de la Renaissance, op.cit.*, p.96 et p.101.

19) C. Beaune は自らが校訂した『シャルル六世・シャルル七世治下におけるパリ一市民の日記』の「噂」を分析して、こちらの逸名日記作者は公的な情報よりも口伝えの情報の真実性を高く評価しており、動詞 dire で記述される内容（rumeur）と、公的なニュース（nouvelles）及び巷で自然発生的に生まれること（bruit）を厳密に区別しているとした（C. Beaune, "La rumeur dans le *Journal* du bourgeois de Paris", in *La circulation des nouvelles au Moyen Age*, Publications de la Sorbonne, 1994, pp.191-203)。また、高橋薫氏はピエール・ド・レトワルの『日記』から「噂」を抽出するために bruit の使用一覧を作成して分析したが（高橋薫、前掲書、pp.466-501)、これらの区別や方法は私たちの二人の日記には適用できないように思われる。

20) 当時の小話集の特徴となっていた「教化」とも関連して、rumeur から nouvelles への「加工」には「信頼できるものとすること」accréditer が重要な役割を果たしていた。このことを Pérouse はフィリップ・ド・ヴィニュールの『新百物語』からも読み取っている（Gabriel-André Pérouse, *op.cit.*, pp.102-103）。

21) フィリップ・ド・ヴィニュールの『年代記』については高橋薫『言葉の現場へ　フランス16世紀における知の中層』第Ⅰ部第1章「メスのひと、フィリップ・ド・ヴィニュール　ー『年代記』の中のアイデンティティーー」（中央大学出版部、2007年）pp.3-55を参照。

22) ピエール・ド・レトワルの『日記』については高橋氏の前掲論文「アンリ三世・四世治下のパリの〈噂〉　ーレトワルとその『日記』ー」及び伊藤進「フランス・ルネサンスの想像界　ーピエール・ド・レトワルの『日記』ー」（Ⅰ～Ⅶ）（中京大学教養論叢35巻、36巻所収）と「ピエール・ド・レトワルと「悲劇的物語」」（『神澤栄三教授退官記念論集』ヴァリエテ特別号，1994年）を参照。

23) Lazard もこの点を認めている（Madeleine Lazard, *op.cit.*, p.403）。

24) *Journal*, pp.4-5.

25) Seguin の表記に従うと、F2、F3、F4、F5、F6、F7、F8、F9（J.-P. Seguin, *L'information en France de Louis XII à Henri II, op.cit.*, pp.76-77）.

26) *Journal*, p.47; p.56; pp.74-77. なおミラノ公国をめぐる和議については、オカジオネルが Seguin によって1点（F10）紹介されている（J.-P. Seguin, *op.cit.*, pp.77-78）。

27) *Journal*, p.76.

28) *Ibid.*, p.26.

29) 伊藤進、前掲論文、（Ⅰ）、p.189；同上論文（Ⅳ）、p.181. これらの記述について Seguin は今では失われてしまったオカジオネルを『日記』作者が利用したと推測している（J.-P. Seguin, *L'information en France de Louis XII à Henri II, op.cit.*, p.31）。

30) *Journal*, p.57.

31) *Ibid.*, p.81.

32) *Les rues & églises de Paris, vers 1500; une fête à la Bastille en 1508; le supplice du maréchal de Biron à la Bastille en 1602*, par A. Bonnardot, Léon Willem, 1876に所収（pp.53-108）。Seguin もこれを F32として挙げており、この版本の元となった写本が失われたことを記している（J.-P. Seguin, *L'information en France de Louis XII à Henri II, op.cit.*, p.81）。

33) 例えば宴会の最後を飾る舞踏会の場面："n'y auoit aultre qui menast les dances fors ceulx qui auoient faulx visaiges ou qui estoitent desguisez." (*Les rues & églises de Paris, op.cit.*, p.107); "y vindrent des masques habillez en hommes et femmes qui dansèrent." (*Journal*, p.77)

34) *Les rues & églises de Paris, op.cit.*, p.78. Bonnardot によるとこの『1518年のバスチーユ宴会』にはラテン語版があり（献辞の日付は少し余裕があって新暦1519年1月10日）、フランス語版とラテン語版のどちらが先に書かれたかは分かっていない（*ibid.*, p.68）。

35) J.-P. Seguin, *L'information en France de Louis XII à Henri II, op.cit.*, p.48.

36) Bonnardot によると『1518年のバスチーユ宴会』には多くの間違いがあって、これが印刷の性急さを証明しているという（*Les rues & églises de Paris, op.cit.*, p.67）。

37) *Livre de raison*, p.74. この一節の最後には「しかしながら事実は逆であった」と追記されている。この追記はヴェルソリの信心深さを逆に証明している。

38) *Journal*, pp.94-96.

39) 伊藤進、前掲論文、(I)、pp.199-201.

40) *Livre de raison*, p.44.

41) *Livre de raison*, p.66. 伊藤進、前掲論文、(V)、pp.161-162も参照。渡辺一夫によって「フランス宗教改革運動の最初の犠牲者」とされている1523年8月8日の Jehan Vallière の事件でも（渡辺一夫、前掲書、p.234)、舌を切られて火あぶりにされる Vallière 修道士の容疑を「異端ルター」hérétique Luter 一味に扇動されて、換言すれば「悪魔的な勧め」suggestion diabolicque によって、悪しき説教を行った所以であるとヴェルソリは記している（*Livre de raison*, p.49)。

42) *Ibid*, p.35. Madeleine Lazard, *op.cit.*, p.402も参照。他にも「驚異」について二人の見解が異なるものに1520年3月の「強風」があるが（*Journal*, p.81; *Livre de raison*, p.29)、ここで詳しく触れる余裕がない。

43) *Livre de raison*, Introduction, p.8.

44) *Ibid.*, p.109.

45) *Journal*, pp.167-168.

46) *Livre de raison*, pp.47-48.

47) *Ibid.*, pp.61-62.

48) ヴェルソリ自身も1524年6月17日には警備命令を受け、街区長の François Rioust の隊に加わって「夜回り」に当たっている（*ibid.*, p.66)。

49) *Journal*, pp.196-201.

50) *Ibid.*, p.197に一カ所、p.198に二カ所（三カ所目はヴェルソリと同じ使用された火薬の説明である)。

51) *Ibid.*, p.198.

52) このパヴィアの戦い（厳密に言えばミラベッロ Mirabello での合戦）については Jean Giono, *Le Désastre de Pavie*, Gallimard, 1963を参照。

53) *Journal*, p.224; p.229; p.232. この記述の順序は Lalanne 版について言い得ることで、叙述の配列が異なると思われる Bourrilly 版については未調査である。この2月24日付の記述は、内容が整理された後にこの日付を付されたと考えるのが自然である。

54) *Ibid.*, pp.232-234. この中にはルイーズ・ド・サヴォア太后の大赦的措置（渡辺一夫、前掲書、p.269）なのであろうか、「世界はネズミに囓られる」などと国王を揶揄するような文書を印刷した廉でコンシエルジュリー牢獄に捉えられていた印刷職人らが釈放されるという事例も記されている。

55) *Livre de raison*, pp.77-79.

56) *Ibid.*, p.78. Lazard もこの点を指摘している（Madeleine Lazard, *op.cit.*, pp.395-396)。

Les journaux de deux bourgeois de Paris sous le règne de François Ier (première partie)
— nouvelles et bruits jusqu'à la défaite de Pavie —

HIRATE Tomohiko

On dispose de journaux, de chroniques, de livres de raison comme documents pour connaître la vie quotidienne d'un individu. Mais, cet individu, comment a-t-il recueilli les informations qui composent la matière de son texte? Qu'est-ce qu'il a écouté, regardé, et lu? Et où et comment? Pour éclairer la nature des savoirs communément partagés à l'époque de François Ier, nous procédons à l'analyse du journal de deux bourgeois de Paris: *Journal d'un bourgeois de Paris sous le règne de François Ier* (1515–1536) et *le livre de raison tenu de 1519 à 1530 par maître Nicolas Versoris.* La personnalité et la vie des narrateurs nous échappent à la lecture de ces journaux. Car ceux-ci se caractérisent par une objectivation qui nous aide cependant à comprendre la mentalité et la nature des savoirs communément partagés par leur milieu.

Nous examinons ici leurs descriptions jusqu'à la défaite de Pavie (février 1525). Ils écrivent tantôt comme témoin oculaire ou auditeur de nouvelles tantôt comme lecteur des écrits (occasionnels, canards) sur les divers événements survenus à Paris ou en province: décisions de la ville, cérémonies publiques, processions, punitions publiques et exécutions, «mauvais garçons», incendies etc... Il est à noter que les deux auteurs partagent une meme interrogation sur le sens à donner aux événements prodigieux: la grande comette d'Anvers, "un vers en vie" de feue madame Vernade, un monstre à tête d'homme juxtaposé à la ballade de Luther. Cette sensibilité nous permet de penser avec vraisemblance qu'ils sont habités par l'anxiété et aussi par la peur de la mort qui les entourait à cette époque. Cette préoccupation transparait dans les multiples insertions sur la naissance et la mort des parents et des gens proches dans *le livre de raison.* L'écriture dans le *Journal* prouve que cet anonyme recourt plus souvent aux écrits que l'auteur du *livre de raison.* Par contre, Versoris exprime quelquefois son propre avis ou son impression des événements alors que l'auteur du *Journal* reste toujours muet sur ces questions.